

金森修先生と書物のこと

奥村大介

研究室紀要 第43号 別刷
東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室
2017年7月

金森修先生と書物のこと

奥村大介

東京大学特別研究員兼非常勤講師〔当時〕の奥村大介と申します。金森修先生には13年間にわたり、学恩を得ました。まずは先生に心より哀悼の意を表します。そして13年間の感謝を申し上げます。ありがとうございました。

1996年に上梓された『バシュラール 科学と詩』（講談社）という美しい書物を通して、私は先生と出会いました。

先生が、数多くの学生の知性と感性を刺激した優れた教員であったことは誰もが知るところですが、私は、一級の著述家、物書きとしての先生から、一番の刺激を受けました。15冊の単著、5冊の編著、2冊の共著、3冊の共編著を公にされた先生は、いうまでもなく偉大な書き手です。同時に先生は、本の読み手としても、偉大なかたでした。私は先生から、文章の書き方と本の読み方を学んだと思っています。もちろん、これはただちに補足しなければならぬのですが、先生は手とり足とり教えてくださるようなタイプのかたではなく、また、いわゆる論文らしい文章といったものを書く方法をご指導くださるというわけでもなく、主に、先生がお書きになったものを通じて学ばせていただいたということです。本の読み方ということも、しばしば大学の演習でおこなわれるように、テキストを細密に読み解くトレーニングとは少し異なり、書物との接し方とでもいうべきものを、これも先生自身が書物と触れ合うその姿勢を通して示していただいたという気がいたします。

ものを読んだり書いたりすることを仕事にしていると、だんだんと本を仕事の道具として扱わざるをえない場面が出てきます。索引であたりをつけて必要な箇所だけを拾い読みするとか、そういうことが増えてきます。しかし、金森先生の読み方というのは違うのです。とにかく通読する。一言一句を精読するということでは必ずしもないのですが、とりあえず最初から最後まで頁をめくるのです。そして赤鉛筆でマーキングをしながら、ていねいに、し

かし猛烈なスピードで読む。そういう読み方です。先生は内容のみならず、文章がよい本、装幀・造本の優れた本をみつけると、嬉しそうに「ほら、こんなにきれいな本なんだよ」と手にとって紹介してくださることもしばしばでした。

金森先生はご自宅の書斎ほかに、東大の研究室と二つの書庫に、本を保管されていました。それは大変な量で、その主要な部分は東大図書館に寄贈することが決まっていますが、寄贈にあたってそれらを分類・整理し、リストを作成する必要があり、何人かのかたにご協力いただき、6月にその作業を行いました¹⁾。正直なところ、これは大変な仕事で、どの書棚も本の分類はごく大まかになされているだけで、全集などのシリーズ物も複数の部屋に分散していて、なかなか揃わない。そして書きこみの夥しい本がかなりあり、それらは図書館寄贈には向かない。要するにこれは先生がご研究のための〈実用の読書〉の対象だった本で、本をフェティッシュに愛してコレクションしたものではなかったわけです。では、研究室や書庫の本がそのようなものだけだったかといえば、決してそうではありません。数々の現代詩人の詩集や20世紀美術の図録・画集、音楽の歴史に関するもの、大衆小説など、先生のお仕事と直接のかかわりは薄い、いわば〈楽しみの読書〉の対象だったらしい書物たちが、大切に保管されていました。

先生は書物をフェティッシュに愛するコレクターではなかったものの、単なる資料として扱うこともまたなさらなかった。それは書き手としての先生の姿勢にも通じるものです。金森先生は「本を単なる資料のように扱い、書類を書くように論文を作成すること」を大変に嫌われ、私たちに戒められました。そんなことをしていると博士論文ぐらいいまでは良いかもしれないが、そのあと30代、40代以降に、何も書けなくなってしまうよ、と。先生の著述は、一種の文人的な名人芸のようなところがあり、先生の論文作法の指導は、いわば反時代的であったかもしれません。

先生が最後に読まれていた本は何だったのか、正確には、存じません。今年〔2016年〕の春、生前最後に研究室でお目にかかった折、「今これを読んでいるだよ」とおっしゃっていたのは粒来哲蔵の詩集『蛾を吐く』（花神社、2011年）という本です。先生は詩がお好きでした。お若いころには自ら詩作をなさったこともあるとうかがっております。

5月30日、葬儀の日、棺に横たわる金森先生の胸元に伏せて置かれていたのは、安部公房の文庫本『R62号の発明』（新潮文庫）でありました。これは銀色の背表紙の新装版でしたので、最近入手されたものであることがわかります。先生は昔から安部公房が好きだとおっしゃっていて、全集を入手されたときには、宝物を自慢する子供のように嬉しそうな顔をしながら見せてくださったことを思い出します。そして晩年には「安部公房論を書きたい。単行本を書ける時間があるかどうかかわからないが、論文でもいいから書きたい」とおっしゃっていました。しかし、先生の安部公房論は完成しませんでした。急速に悪化するご体調のなか、もはやあの大きな判型でずしりと重い安部公房全集を持ち上げる体力が先生にはなかったのでしょうか、新たに買い求められた文庫本でお読みになっていたのだと思うと悲痛な思いがいたします。同時に、安部公房のファンならばおわかりになると思いますが、この作品、とくに表題作「R62号の発明」は初期短篇の一つで、リストラされたエンジニアが自分の体を秘密組織に売り渡し、生きたままにロボットになるという、安部公房作品のなかでも、かなりどぎつい短篇です。正直なところ重篤な病におかされた人が病床で読む類の本とは、あまり思えません。それにもかかわらず、これをベッドでお読みになっていたのかと思うと、よほど思い入れがあったのか、それとも、どうしても安部公房論をお書きになろうと資料を読み込む一環で最後までお読みになっていたのかと、何とも複雑な気持ちになります。しかし、先生のお体の上に、読みかけた状態で伏せて置かれ、安部公房自身の撮影した写真によるメタリックな装丁がなされた文庫本が見えたときには、金森先生らしい、どこかクールな印象

があって、私は「本を読み続けた先生、恰好いいですよ。最後はその本でしたか」と心のなかでつぶやきました。

先生が若き日に熱中されたフランスの思想家バシュラールは、晩年に、次のように述べています。「かなた空の上にある楽園は無尽蔵の図書館ではないだろうか」。金森先生の天国はどんなところでしょうか。

先生は、今年〔2016年〕5月1日、これから刊行される或る編著²⁾について、私たち執筆者に一斉送信のメールで、この本の完成をみる時間が残されていないことを示唆された上で、次のように書かれました。「私の〈魂〉が、書店でこの本を探し回る様子がいまから想像できます」。独特の軽やかさをお持ちだった先生は、あるいは空のかなたの図書館におちついていることはできず、いまも自身の著作が数々並んでいる書店に舞い降り、新しいことを勉強されるのが何よりの楽しみであった先生は、新刊の棚にならぶ書物の上を、蝶のように、本から本へと、軽々と行き来されているのかもしれない。

先生、また面白い本はみつかりましたか？

附記：本稿は2016年7月20日、東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター地下2階多目的ホールで行なわれた「金森修先生 お別れの会」で読み上げた〈お別れの言葉〉を元としている。この会の準備や蔵書の整理などが連日続くなか限られた時間で一気に書いたものであり、筆の運びは甚だ拙いが、思う所あって、加筆修正は〔 〕内の補足と二つの註のみとし、そのほかは当日読み上げた言葉をほぼそのままに再現してある。

注

- 1) その詳細については、本紀要に掲載される拙稿「まだ見ぬ図書館へ——金森修先生蔵書整理の記録」を参照されたい。
- 2) 金森修編『明治・大正期の科学思想史』勁草書房、2017年刊行予定。